

南アルプス市立豊小学校前期自己評価書

令和2年9月9日（金）

1 前期自己評価の経過

- (1) 前期教職員自己評価及び児童対象アンケートの実施（7月）
- (2) 自己評価及びアンケート結果を基にした職員会議及び学年会議にて状況分析と改善方策の検討（8月17日）
- (3) 学校関係者評価委員による自己評価書の検討（9月9日）

2 学校評価の分析と改善方策

(1) 教育目標について

本校の学校教育目標は「たくましく 心豊かな 子どもの育成」であり、①自ら学び続ける子ども（かしこく） ②相手を敬い、思いやる子ども（なかよく） ③自分の体を守り、鍛える子ども（たくましく）の3つを具体目標としている。

目標を達成していくために、①創る…「たくましい力」を育てる授業の創造、②育む…「しなやかな心」を育む教育活動の充実、③高める…個々の力を高める特別支援教育の充実、④整える…保護者や地域から信頼される教育環境の整備 を4つの柱として位置づけ、教育活動を推進している。

学習指導要領が改訂されたことを受け、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る授業改善（①創るに位置付け）は、本年度の重点事項である。これは、小中一貫教育の柱にもなっている。

また、相互に認め合う学級集団づくり（②育むに位置付け）や個々のニーズに応じた指導の工夫（③高めるに位置付け）は、本校の課題解決に向けた重点事項である。

新型コロナウイルス感染症への対応等は、新たな取組であり、評価項目を改善・重点化（④調えるに位置付け）する形で取組を進めている。

職員会議や校内研究会等、日々の教育活動・研究活動を計画、実行、評価する場面で教育目標や具体目標、重点事項について周知徹底を図っている。今後も、教職員間の連携・協力体制を機能させ、PDCAサイクルを意識しながら、教育活動の推進を図り、教育目標等の実現を図っていく。

(2) 学校経営・組織について

教職員が個々の能力や経験を生かして相互に協力・理解を図りながら組織的な取組を行うことにより、質の高い教育活動を目指している。また、個々の児童の抱える様々な問題や特別な支援を必要とする児童の増加に対しては、教職員間の意思疎通を図りながら組織的な対応を進めている。

今年度は、特別支援教育コーディネーターを昨年度より1人増員し、3人体制とした。3人の教職員のコーディネートにより、校内支援委員会やケース会議を開催し、情報共有と指導・支援内容の相談・確認を行っている。個々のニーズに応じた指導や支援ができるよう、積極的に関係機関とも連携を図りながら対応している。

また、各種疾患やアレルギーのある児童への理解と迅速な対応を図るため、教職員の研修も計画的に実施している。

スマートフォンやインターネットを利用する児童が増えていることに伴い、防災・防犯等に向けた取組としては、SNSやオンラインゲーム上で、犯罪に巻き込まれないための指導を重視している。高学年児童だけでなく、保護者に向け、情報端末の正しい使い方について継続的に情報を発信していく。地震や火事、事件が起こった場合の対応については、教職員

を含めての訓練が重要であり、危機管理マニュアルの周知徹底を図りながら、迅速かつ適切な対応がとれるように取り組んでいく。

3 学習指導について

本校では、「豊小学校学びプラン」を活用し、学習規律や学習習慣の定着に取り組んでいる。また、児童間の関わり合いを基盤とし、学習プロセスや言語活動を重視した授業展開によって、主体的・対話的で深い学びの実現を図り、学習指導要領で示される資質・能力の育成に取り組んでいる。

自己評価の結果を見ると、「3 話し合い、討論、発表などの言語活動を効果的に取り入れている」、また「6 実践活動や体験活動を生かし、考え議論する道徳の授業を行っている」か、の2項目については他の項目と比較し、低い平均値となった。

年度始めの臨時休業により授業時数が削減されたこと、感染症を蔓延させないための手立てとして児童間で対話する場面を避けたこと等が、その要因として考えられる。

今後は、感染症対策を講じながら、学習課題の提示や学習の振り返りといった学習プロセスの確認や、言語活動の工夫等に取り組んでいく。何を重視し、どこに時間をかけて指導するのか、といった視点も重要になる。

また、ICT機器等を効果的に活用した授業の構築についても準備を進めていく必要がある。設備的に十分ではないことから、現状として難しい面があるが、子どもたちの学習を保障するために、教職員の研修等、できることから積極的に取り組んでいく。

4 特別活動について

新型コロナウイルス感染症の影響により、児童会活動や学校行事が十分に行えていない状況にある。

児童会活動については、「ONE TEAM」という児童会テーマのもと、1学期末から取組を始めた。TEAMのスペルを使った、「T：友達いっぱい豊の子活動」「E：いいね!ピカピカ豊の子活動」「A：明るいあいさつ豊の子活動」「M：みんなで応援豊の子活動」の4つが、柱となる活動である。

「E」に位置づけられた「無言でピカピカ清掃作戦」は、感染症対策にもつながり、継続的に取り組んでいる。学習する場所をきれいにするということだけでなく、心を磨く取組であり、楡形中学校での取組（清掃活動）にもつながっている（小中一貫教育）。

リサイクル活動、ボランティア活動については、学年を単位に取り組んでいる。本年度も3年生はエコキャップ回収、4年生はアルミ缶回収、5年生はベルマーク収集、6年生は牛乳パック・なんでも紙回収と、継続的に活動を行っている。児童の意欲を高めるとともに、成就感や満足感につながる活動となっている。

児童会活動や学校行事等については、今後も活動を制限される場面が出てくる。各活動のねらいを明確にし、実施方法を工夫することでねらいを達成することが必要になってくる。運動会をはじめ、2学期は多くの学校行事が計画されている。地域や家庭の理解を得ながら連携を図ることにも留意し、行事の成功と児童の確かな成長につなげていく。

5 生徒指導・生活指導について

生徒指導を充実させていくには、日頃から学級・学年経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係や児童相互の好ましい人間関係を育てることが大切である。「1 教育目標」の項でふれたように、「相互に認め合う学級集団づくり」や「個々のニーズに応じた指導の工夫」等の取組を進め、組織的に生徒指導・生活指導を行っている。

自己評価の結果が示すとおり、「児童理解のためにコミュニケーションを図っている」、

「問題行動の早期発見・早期対応に努めている」等については、全教職員が意識的に取り組んでいる。いじめや不登校の解消に向け、今後も取組を進めていく。

最近になって、SNSやオンラインゲーム上でのトラブルが発生している。学校以外で起きている問題であるが、友達関係に大きな影響を及ぼすこともある。実態を把握するとともに、家庭の協力を得ながら対策を講じていく。保護者を含めた形で学習の機会を設け、取組を本格化させていく。

6 P T A ・地域社会

本校では、養蚕指導、切子指導、水泳指導、合唱指導、学習支援等において、地域住民や学校関係者の支援を受けている。また、早朝作業（愛校作業）や運動会への協力など、保護者の力を借り、教育活動を行ってきている。

今年度に関しては、新型コロナウイルス感染症の影響により、支援を受けづらく、充実した教育活動の機会が失われてしまっている。「1 教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っている」の平均値が低いのは、このためであると考えられる。

養蚕指導については、蚕の頭数を減らす等の対応を講じた。施設訪問ができない分は、教職員が訪問し、訪問先での画像やインタビューを教材化して指導にあたってきた。今後も、連携方法を工夫しながら、教育活動や教育環境整備に取り組んでいく。

登下校の見守りや伝統的な文化活動等、地域住民や保護者の協力なしでは実現できないこともある。P T A活動や学校だより等において協力、連携を呼び掛けていく。

また、「めざす豊の子」の実現に向け、社会に開かれた教育課程の充実を図っていく。

7 その他

新型コロナウイルス感染症への対策に関しては、担当職員を中心に対処策を検討し、全教職員で共通理解を図りながら取組を行ってきた。医療関係者からの援助や助言を受けながら指導資料を作成し、家庭の理解や協力も得てきた。気をゆるめることなく、今後も児童や教職員の健康を守る取組を継続していく。

小中学校の教職員で集まり会議を開催することができなかつたため、小中一貫教育への取組は、研究がスタートしたばかりという状況である。小中学校で連携し取り組んできたことを振り返り、これまでの取組をブラッシュアップすることで、小中一貫教育に向けた取組を進めていく。全職員による共通理解だけでなく、地域住民や保護者に説明し、理解と協力を求める活動も大事になってくると考えている。